

## 民話の語りから広がる想像力

新潟県語り連顧問 高橋 実

民話の語り始めてまもなく二十年になる。現職時代教室で語ったのは、「へっこき嫁」だった。大きな屁を放つ嫁が、離縁されそうになるが、その屁の効用で家に貢献するという大話である。途方もない空想的な誇張を主題にした一群の笑話である。

以来いろいろな人の前で語り続けてきた。

「おぐに雪まつり」で最初語ったときには、立とうとすると、緊張で足がつって立てず、やむなく、次の語り手山崎正治さんに交代してもらったことがあった。

なんととっても聞いてくれる人がいるというのは語りの基本である。その人たちの反応で語りが支えられてきた。そういう意味で語りは語る人と聞く人との共同作業と言っても過言ではない。それが「さんすけ」「きーす」といった相槌の言葉になったのであろう。だから語りの稽古も壁に向かって一人で語っていては少しも上達しない。人前で語ることに最高の稽古になる。

その時、大事なキーワードを忘れてしまって恥をかいでしまう。それが次の語りのステップにつながる。聞く方も語る人をしっかり見て、耳で聞くのではなく、「目で聞く」とさえ言われている。今「読み聞かせ」や「紙芝居」がブームである。これらが本や絵という媒体の中に

入れて語るのに、民話語りはそうした媒体がない。武器を持たずに素手で相手に立ち向かってゆくのである。

そういう意味では落語と似ている。落語はそばをすする動作において、持っている扇子が箸になり、左手が器になり、顔の表情で蕎麦をすする仕種になる。落語ほどはでな表情はないが、語りによって、聞き手の脳裏に場面が浮かび上がる、つまり聞き手の頭のスクリーンに場面が浮かぶ想像力の訓練が語りといえる。聞き手の脳裏にどんな場面が浮かぶか、その技術が語り手の技術と言える。「笠地蔵」の雪の中に立つ地蔵の姿、「三枚の札」の闇夜の灯りを見つけた場面、すべて想像力である。いじめや虐待は相手の気持ちへの想像力の欠如から生まれる。

今スマホのメールの時代になった。子ども達が集まっても、スマホの場面を見て、指先だけを動かして、声が聞こえない沈黙の集団をあちこちに見る。声を出す言葉という相手への思いやりも失われる。

語りはかつての囲炉裏の周りで聞く、小集団の語りだった。それが今では、舞台の上での語りと変わってきている。でも人間本来の肉声によるコミュニケーションこそ語りの本来の使命でなかろうか。この語りがこれから喜ばれるためにどんどん語り続けたいものである。